

看護婦が がんになって



小笠原信之
土橋律子
[著]

日本評論社

看護婦が がんになって



小笠原信之
土橋律子
[著]

日本評論社

かんごふ
看護婦ががんになって



2000年2月15日 第一版第一刷発行

著者——小笠原信之・土橋律子

発行者——大石 進 発行所——株式会社 日本評論社

東京都豊島区南大塚3-12-4 振替00100-3-16

電話03-3987-8621 (販売), -8598 (編集)

印刷所——ル・パピエ (整版)+株式会社 平文社 (印刷)

製本所——難波製本

装幀——駒井佑二



© OGASAWARA Nobuyuki & TSUCHIHASHI Noriko 2000 Printed in Japan

☐本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

I S B N 4-535-98167-1

看護婦ががんになって

.....目 次.....

●第一部 看護婦ががんになって

第1章 がん宣告……………3

第2章 がんにかかるまで……………27

第3章 闘病本番……………37

第4章 「戦友」たちへのケア……………63

第5章 ノンちゃんを支えてくれた人たち……………75

●第二部 地域へ飛び出す

第6章 模 索……………89

第7章 復 職……………107

第8章	よりよい看護を……………	125
-----	--------------	-----

第9章	ターミナルケアこそ天職……………	139
-----	------------------	-----

第10章	地域で始動……………	161
------	------------	-----

第11章	納得のいく在宅看取りとは……………	171
------	-------------------	-----

第12章	地域の力を借りる……………	205
------	---------------	-----

● 第三部 支え合って生きる 土橋 律子

第13章	がんは他人ごとではなく自分ごと……………	227
------	----------------------	-----

第14章	看護をめざす仲間たちに……………	237
------	------------------	-----

第15章	がん体験者として生きる……………	261
------	------------------	-----

あとがき……………	277
-----------	-----

.....
第一部
.....

看護婦ががんになって



第1章

がん宣告

ちょうど一〇年前。秋の色が濃い一〇月半ば、土橋律子さん（当時三四歳）はいつもと同じように、午前最後の患者として千葉県がんセンター婦人科で診察を受けた。職場はちがっても、看護婦という身内意識もはたらいて、いつも最後に受診しているのだった。婦人科はセンター二階にある。受付の前の廊下には長椅子が置かれ、受付横から細い通路が廊下に直角に伸びている。その通路に沿って小さな診察室が、ウナギの寝床のように並んでいる。各部屋は診察ベッドの頭側と足側を仕切るカーテンの裏側がやはり通路になって通じていて、医師や看護婦が自由に通行できる。土橋さんは手前の診察室で診察を終えてから、いちばん奥の婦人科部長の部屋で説明を聞くことになった。部長席横の小さな丸椅子に座る。S部長はいない。主治医のY医師が口を開いた。

「残念ながらスメラ（細胞診）で三回、異型細胞が出て……」

すべてを察した。結果はやっぱりクロだったのだ。説明を聞くうちにこらえていた涙が一滴、ツツと流れた。みつともない、なぜ泣くんだろう、との思いが交錯し、わりにつくり笑いさえ浮かべていた。頭の半分が動転し、もう半分が冷静だった。こんなちぐはぐな感情に自分でもとまどっていた。Y医師の説明の途中にS部長が入ってきた。同じ説明を部長がくりかえしたが、目を真っ赤にした患者を前に話にくそうだ。温厚な人柄がにじみ出る説明だった。聞きながら彼女は、申しわけないとの思いにかられていた。まだ半分が看護婦で、もう半分しか患者になっていなかった。その患者の部分が遠慮さえしていた。

眠っていた紹介状

千葉大学医学部附属病院眼科病棟で副婦長をしていた土橋律子さんは、一九八九年春先、体調に異常を感じた。生理の周期がやけに長く、からだがだるく、かぜをひきやすい。長野県・小海町の生まれで、中学時代からスピード・スケートに本格的に打ち込み、大学附属の看護学校ではテニスを楽しむほどのスポーツ好き。「元気で明るいノンちゃん」と親しまれ、本人も体力には自信があった。それまで大きな病気という病気をしかなかった。おかしいなと思った。

その一方で、日常の看護業務は目が回るほど忙しかった。中間管理職の副婦長になって二年目に入ったばかりだった。仕事の上であれこれの軋轢あつれきもあった。きつとストレスのせいよ、と自分を納



スポーツ好きで体力には自信があった土橋さんだったが

得させるようにしていたが、ひと月、ふた月たっても症状はいっこうに収まらず、むしろひどくなっていた。職業上、いろいろな病人を見てきているし、知識もある。もしかして、と心の片隅で最悪の不安が頭をもたげてきてもおかしくない。

さっそく、以前同じ職場だった知り合いの医師に、千葉県がんセンター婦人科宛に紹介状を書いてもらうことにした。大学病院とがんセンターのあいだでは医師の人事交流をはじめなにかと関係が深く、両院の医療者のあいだでは「兄弟病院」といった感覚があった。医師は二つ返事で紹介状を書いてくれたのだが、この紹介状は三カ月間、彼女のカバンの中に眠っていた。ご本人はこう振り返る。

「きつとこわかったんでしょね。それに、とにかく忙しかったし、日常業務には支障がなかったから、もうひと月待ってみようと先延ばしし

て……」

もし子宮の病気だったら、生理後に子宮内膜がはがれてから検査をしないと子宮内部のことがよくわからないので、次の生理まで待つてみようと思ったのだ。そうこうしているうちに夏休みも入り、紹介状は古くなつてしまった。もう一度、同じ医師に紹介状を書き直してもらつた。看護婦ゆえの医学知識で理屈をつけながらも、ほんとうのところでは脅えが行動を鈍らせていたのかもしれない。

結局、がんセンターを訪ねたのは、九月の末だった。医師は子宮頸部を簡単に診て問題はないと判断した。内部については薬を使って早めに生理をおこさせてから診たほうがいいと言つたが、土橋さんは検査が遅れることに不安を訴えた。そこで内視鏡検査をすることになった。「なんだ、こりゃあ」と突然、医師が声を上げた。急遽、バイオプシー（生検）をすることになった。「ごめん、ちよつと痛いよ」とことわつたが、麻酔もなしに内視鏡で直接組織をとられたときの痛さは「目から星が出る」ほどだった。組織検査の結果は二週間後に出ることになった。

どうあがいたって

告知には、S部長のほかに三人の医師が立ち会つていた。みんなS部長の話に真剣に耳を傾けている。四人もの医師に囲まれたかたちでの告知は異例であり、本人にはとてもありがたくうれしい

ものだった。一般の患者が見たら、なんという特別扱いと、^{ひんしめ}響きさえ買いかねない厚遇ではある。しかし、こんな手厚いもてなしのなかにも何かがたりないことに、彼女は気づいた。

医師は四人もいるのに、看護婦がいないのだ。カーテンの背後に人の気配はする。きつと看護婦かもしれない。手術から術後の管理、闘病という大事なプロセスでいちばん近くから患者を支えるのは、看護婦だ。その看護婦が患者にとってもっとも大事な瞬間である告知に立ち会っていない。カーテンの陰で耳をそばだてているのかもしれない。自分だったらこんなときどうするだろうと思ったら、彼女は無性に悲しくなった。

このあとに何度か体験する入院生活でも、彼女の目は医療者たち、とりわけ同業の看護婦たちの動きに向けられる。看護婦ががんになった。それは医療者として不覚のことだし、とてもつらいことだが、患者と医療者両方の目をもった立場で医療の現実をしっかりと観察してやろうとの思いが、すでに告知時から芽生えているのだ。入院四日目の闘病日記にもう、「私は今、とてもいい経験をしている。今回の貴重な体験をエサにしよう！きちんと消化して私の血肉としなくちゃいけない現状を、現実をしっかりと見つめよう。目をそらしてはいけない。どうあがいたって、これが現実」(一九八九年一〇月三〇日)という記述が見られる。なんとも貪欲で前向きな性格である。

病名は子宮体がん^{たい}で、初期のⅠーⅡだった。子宮がんには「頸がん^{けい}」と「体がん」の二種類がある。日本人は約九割が頸がん、一割が体がん^{たい}で、子宮の奥にできる体がんは閉経後などの高齢者の罹患が多い。しかも体がんは肥満が主要因子ともいわれている。まだ三〇代で未婚、体型もすらり

としている彼女には、当てはまらないものだった。最初の受診時に医師も頸がんを考えていたように、「なんでもないよ。大丈夫だよ」とさえ言ってくれていたのだ。患者本人にすれば、意外などんでん返しに遭ったような気分である。

しかし、母方の祖母が子宮がんをやっているがん家系だった。自分がずっと勤めてきた外科系の看護現場で見てきたがん患者の中には、一年前の検診では何も発見されなかったのに、見つかったときにはすでに末期になっていたという人もいる。「がんⅡ死」というイメージが彼女自身の心の中にも根強かった。ところが、婦人科の医師たちはひと月やふた月置いておいても婦人科のがんは大きさが変わらないと説明してくれた。どうやら彼らは、私の子宮がんを盲腸に毛が生えたくらいにしか考えていないという感触を得て、やっと心が落ち着いてきたという。

泣けずに鍋底磨き

とはいえ、告知を受けた直後の彼女は錯乱したままだった。すぐにトイレに入り鏡を見たら、目が真っ赤だった。どこかで存分に泣かないといけないと思った。一階に下りて入院予約をしていると、テニス仲間で大病院からがんセンターに移ったR医師がたまたま通りかかった。

「どうしたの？ だれか知り合いでも入院するの？」

と、いつもの調子で聞いてきた。話したら関を切ったように泣き出してしまうのは目にみえている。

「先生、向こうにいつていてください。もうじき私がここに入院します」と答えるのが精一杯だった。これで、ますます泣かなくなてはいけないと思った彼女は、自分の車の中に入って泣きはじめたが、仕事のことや前年から引き受けた看護学校の授業（副婦長になると、看護学校の講師をつとめる慣行があった。後期の期末試験をひかえて、その試験問題の作成に追われている時期だった）のことなどが頭の中でものすごい速さで回転をはじめ、泣けない。

勤務先の大学病院看護部へは告知をした婦人科部長がその場で電話を入れ、「手術、入院で三週間ほどかかるけど、配慮してあげてください」と事情を伝えておいてくれた。でも、自分の口からも報告しておかなくてはと思い、その足で大学病院へ向かった。ここなら泣かせてもらえるだろうとの期待が、内心にはあった。

三階の看護部に看護部長（婦長職）がいた。土橋さんが附属の看護学校に通っていたころの教務主任だった人だ。勤務病棟の婦長もよばれた。二人にこれまでの経過を話し、看護学校の授業のこと、病棟の仕事のことなどを相談した。しかし、婦長の口について出てきた第一声はこうだった。

「困りましたねえ」

すでに後輩看護婦が一人、扁桃腺を腫らして一週間入院していた。ただでさえ人がたりないのに、同じ時期に二人も休んだら困るというのだ。部長と婦長は、ハンカチを取り出して涙を拭う土橋さんから目をそらせるようにして、こんな話をつづけた。

「彼女はまだ若いし、これから妊娠もするだろうし……」

この後輩は、「いずれ子どもをつくる体だから早く扁桃腺をきちんとしておいたほうがいいと思って」との本人の希望で休んでいるのだった。しかし、これから子宮を取られて子どもを産めなくなろうという女性を前に、する会話ではない。自分への配慮がまったく欠けていることに土橋さんは腹が立った。

「そういう話をなぜここでしなければいけないんですか。とてもつらい。私のことも考えてください」と机を叩いたら、婦長は「そんなつもりで言ったのではないのよ」と言いわけをした。代役として担当することになった看護学校の授業にも、婦長は気乗りのしないようすだった。

ああ、やっぱりこういう人だったんだ、私の病気は半分以上、この人のせいだろう、と思った。

その前にもストレスのたまることがいっぱいあつてのことである。そのくわしい話は次章に譲るが、告知直後の特別な精神状態にあつたこともあつて、このときの彼女は病気の原因を折り合いのよくない上司に押しつけていた。ただしこの思いは、つらく過酷な闘病をつづけた後には、「私も若くて未熟で我が強かった。そのときには怒りの対象にしましたけど、その人がいようがいまいが、病気はやっぱり自分の問題だと思うようになりました」というものに変わつてはいる。

それはともかく、ここでも彼女は泣けなかった。このあと自宅アパートに戻って彼女がまずはじめたのは、台所の鍋類を全部出すことだった。そして、鍋底を一つひとつ磨きだしたのだ。無心だった。時間の経過もわからないほど、この単純作業に打ち込んだ。それが終わると、床も磨きだした。わけもなくごみを捨てなくなり、あれもこれもと袋の中に投げ込んだ。とにかく何も考えたく

なかったのだ。いつのまにか、夜中になっていた。静かだった。電話一本鳴らない。妙に透明で、それでいてどこかモヤのかかったような時間がゆっくりと流れる。じっとしていると押しつぶされそうな気分になった。そうだ、春（仮名）に電話しようと思い立った。

春は看護学校時代の同級生で、今は栃木県内の小学校で養護教員をしている。二人は看護学校の寮にいたとき、隣の部屋同士で仲良しだった。卒業後もおたがいの悩み事を相談するなどして、気の置けない親友となっていた。

「ほんとうにばかなんだから。ぎりぎりまで連絡して来ないで、一人で悩んでいたんでしよう？」もう何年も会っていなかったが、土橋さんの気性は十分にわかってくれていた。積もる話がいっぱいあった。がんの話は少しだけ。そして涙も少しだけ流したが、あとは学校時代のこと、人とのつきあいのむずかしさやら仕事のやりがいのことなどで話がはずんだ。しかも二日後に栃木からわざわざかけつけてくれるという。心のどこかに晴れ間がのぞいたようで、親友に再会できることだけでわくわくしている自分に、どこかおかしい思いさえ湧いていた。おかげでその夜はぐっすりと眠れた。

がんに決まっているよね

それからちょうど二週間後の一〇月二六日に、千葉県がんセンターに入院。入院予約時にばった